

A-60 肥満度における正常値の検討(学童の食生活・食習慣からの追求)

金沢大医 〇坂本佳代 岡田晃  
実践女大家政 岡整美子 連水決

目的 近年、学童において肥満が増加し問題にされていることは周知のことであり、子供から大人への肥満と継続していく例は数多い。肥満の原因としては、食生活の環境的遺伝・カロリーオーバー、運動不足などがある。ここで注目したいのは、現在用いられている肥満度と所要量の問題である。学童が多くつかわれているローレル指数、大人において BROCA 指数とも標準正常値が高すぎるのではないかと、そして肥満増加の成因は、栄養所要量が大きすぎるためではないかという点である。今回は学童においてその検討を行った。

方法 石川県金沢市と東京都渋谷区の2地区の都市部において小学6年生約300名を対象に食生活・日常の運動量のアンケート調査を行った。それを、個々のローレル指数と比較し、130以上の学童に観点を置き、 $<130$ ,  $130 \leq <140$ ,  $140 \leq <150$ ,  $150 \leq <160$ ,  $160 \leq <170$ ,  $170 \leq$ 、に分けて食物摂取頻度、食事量、自分の体形に対する意識的の判定度との比較などを行った。

結果 肥満と判定されるのは160以上であるが、160以上のものが、東京・金沢ともほとんどなく、140台で女子において自分は太っていると判定する者が80%を示している。又、食事量が多いと答えにものも男女とも50%以上であった。つまり肥満としてコントロールではローレル指数140前後と基礎とをばければならないと思われる。食品の種類が激増し栄養価の高い物もどんどん市場にでている今日では、栄養所要量を決定した時代と比較すると大きく変わっており、指標を改めなければならぬ時期にきているのではないかと、そしてそれが、肥満対策につながるのではないかとと思われる。